

くすのき

日南市立東郷小中学校だより第10号
R8.1.28(水) 文責:校長



◆第17回日南市新春子どもの声を聴く会◆

1月20日(火)、市ふれあい健やかセンターにて、「日南市新春子どもの声を聴く会」が開催され、市内小・中学校それぞれの代表児童生徒が発表しました。

東郷中代表の8年生生徒は、読書体験を通して、人とのつながりの大切さを感じ、自分の生活や考えを見つめ直すきっかけになったことを、温かい言葉で表現してくれました。その作文を紹介します。



「夏の体温」から学んだつながりの温かさ

東郷中学校 8年生生徒

私は、瀬尾まいこさんの、長期入院をしている小学生の瑛介と、検査入院で同じ病室になった壮太との交流を描いた短編「夏の体温」を読んで、「人とのつながり」がどれほど大きな力を持つのかを深く考えさせられました。瑛介は夏休みの間ずっと病院にいて、同級生と遊ぶことも、外の空気を思い切り吸うこともできません。病院での毎日は単調で、季節の変化も感じられません。そんな瑛介に退院した壮太から、夏の暑さを感じてほしいと干からびた虫が同封された手紙が届きます。私は、「虫を送るなんて…」と驚きました。しかし、読み進めるうちに、「病室では感じられない外の世界を少しでも伝えたい」という純粋な気持ちがあることに気づきました。このエピソードは、物を通してでも、何かを伝えたい気持ちは確かに相手に届くのだと感じさせてくれました。

この物語を読んで、私は自分の生活を振り返りました。毎日学校へ行き、友達と過ごし、部活動をして家に帰る。そんな当たり前の繰り返しを、私はときどき「退屈」だと感じるがあります。しかし、その当たり前は実はとても恵まれたことなのだ気づきました。もし自分が長期入院することになったら、学校のざわざわした音や、真夏の部活動で流す汗でさえ、恋しくなるかもしれません。

また、壮太の行動からは、「相手の立場を想像すること」の大切さを学びました。相手が何を必要としているのかを考え、そのために自分ができることを行動に移す。これは簡単なようでとても難しいことです。壮太は迷わず「伝えたい」という思いを行動に移しています。その純粋さと行動力を見習いたいと思いました。

そして私はまわりに、もっと自分の気持ちを素直に伝えようと思うようになりました。メールやメッセージではなく、会って声を聞き、表情を見て話す。その時間の中でしか生まれない温かさを、これからはもっと大切にしていきたいと思いました。

この「夏の体温」には、日常の中に隠れている小さな温かさが描き出されています。そしてそれは、私たちが普段気づかずに通り過ぎてしまう大切なものに、そっと光を当ててくれます。たった三日間の瑛介と壮太の病院での生活そしてその後の手紙から、二人の友情を強く感じることができました。さらに、当たり前の毎日の価値に気づき、人とのつながりをもっと大切にしていきたいと思うこともできました。これからは、関わりを持つ全ての人たちへ感謝をしながら、毎日を過ごしていきたいと思えます。

